

電磁波で紡ぐ北陸の自然と伝統・先端技術

編集にあたって

特別小特集編集委員会委員長 堀 俊和

「地方の時代」といわれて久しいが、「北陸」は、自然が織りなす素朴さと海山の豊富な幸とともに、冬の日本海の暗いイメージをも払拭するに足る優雅な伝統技術、更には日本あるいは世界を先導する先端技術の宝庫である。9年前、学生時代を過ごした北陸の地に25年ぶりに戻り、新たな目で北陸の地に接したとき、「自然」、「伝統」及び「先端」の新たな調和に心の高まりを感じた記憶がある。学生時代に慣れ親しんだ北陸の自然と伝統が、先端技術と調和し、新たな発想に基づく新たな技術を生み出し続けている「北陸」がそこにあった。

一方、昨今の携帯電話やワイヤレス LAN の普及に伴う「ユビキタスの時代」において、電磁波技術は不可欠な技術である。アンテナ・伝搬技術というまでもなく、ワイヤレス技術のすべてにおいて、より新たな展開が望まれており、北陸地域においても新たな開発が進められている。最新技術である WiMAX (Worldwide Interoperability for Microwave Access) の商用サービスも、日本で最初に福井県敦賀市において開始されている。このように、北陸は「電磁波」に関する先進地域でもある。

今回の北陸支部担当の特別小特集の編集にあたり、「自然」、「伝統」及び「先端」の三つの面を縦糸に、「電磁波」を横糸として、北陸における電磁波技術の優雅さ・豊富さに迫るべく、「電磁波で紡ぐ北陸の自然と伝統・先端技術」と題した特別小特集を企画した。

まず、「電磁波で知る北陸の自然」と題して、「自然」に着目した。白山、立山に代表される山岳、能登、氷見、魚津、越前海岸、東尋坊に代表される海辺、それら

の海山から得られる山菜、魚貝類、カニ、ホタルイカ等の自然の恵み…、北陸の自然を表現する言葉には際限がない。更には「雪おこし」と呼ばれる雷に代表される北陸特有の気候も無視はできない。ここでは、特に、雷と生き物に着目して、電磁波技術との関連を考えている。

次に、「電磁波が奏でる北陸の伝統技術」と題して、「伝統」を取り上げた。北陸の代表的な伝統技術は、加賀友禅に代表される繊維と、九谷焼に代表される陶磁器である。ここでは、繊維と陶磁器の電磁波領域への応用について考えている。残念ながら、宝生流の能に代表される伝統芸術については、電磁波技術との接点を求められなかった。これについては今後の課題である。

最後に、「北陸で育つ電磁波先端技術」と題して、北陸で育っている「先端」技術を対象とした。先端技術も列挙すればきりが無いが、ここでは、ユビキタス社会に不可欠な技術として、アンテナと RFID を取り上げている。

以上述べたように、本特別小特集では、北陸地域における「自然」、「伝統」及び「先端」と「電磁波」との調和・協調を前面に打ち出して、「北陸」の存在感を語っている。一般に、イメージとしての「北陸」はよく知られているものの、北陸を構成する石川、富山、福井の県名及び位置をまともに答えられない高校生が半数以上もいるという驚くべき現実の中で、本特別小特集が少しでも「北陸」の存在アピールにつながれば幸いである。

最後に、本特別小特集の編集にあたり、企画提案を頂いた太田聡前北陸支部長をはじめ、具体的な企画及び編集に御尽力頂いた編集委員各位、本特別小特集編集委員会の独断的な企画に対し快く執筆をお引き受け頂いた執筆者の皆様、並びに編集の遅れにも優しく御対応頂いた本誌編集担当の方々に厚く御礼を申し上げる。

平成 22 年 10 月号特別小特集編集委員会

委員長 堀 俊和 (福井大学)	幹事 牧野 滋 (金沢工業大学)	委員 太田 聡 (富山県立大学)
委員 中山 謙二 (金沢大学)	委員 藤田 輝雄 (福井工業大学)	委員 八木谷 聡 (金沢大学)